

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2024. 6



令和6年6月1日発行(毎月1回1日発行)第72巻第6号

No.793

デフォルト

玉井 綾子

帰宅時の電車から見る荒川の波動に明日の多事を予見す
 年は予定把握が肝要と一回り大きな手帳を買う
 五年後に定年の吾は後進に引き継ぐ為にシステム覚ゆ
 帰宅後も会社で受けし問い合わせ電話の解を考えている
 回答はひとつではなし帰宅時も入浴中も解探す脳
 帰宅して明後日確認することをメモに書きだす休み前の日
 休日も仕事のことが離れないふと気を抜くと考えている
 残業は許されなくとも休日に脳が仕事にアクセスしてる

一九六九年生まれ。
 羊グループ所属。
 歌集に「発酵」がある。

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2024. 6



令和6年6月1日発行(毎月1回1日発行)第72巻第6号

No.793

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下してまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二四年 六月号 (通巻七九三号)

◇今月の二十首詠……デフォルト

玉井綾子 2

■作品

〔A〕

中島央子・永田進一他

4

A

中須賀美佐子他

20

B

中江京子他

50

C

永井秀次郎他

62

A

大槻智子他

74

■オリーブ集

岩月宏彦・尾形悦子他

36

◇今月の二人

古瀬由紀子・今井敏博

16

■鑑賞・三好直太の歌 11 〈盛忙〉

久我田鶴子

15

私と短歌との出会い (262)

浜脇景子

19

■〈第一歌集を読む〉 15

牧 雄彦歌集「誰もるぬ部屋」

― 鋭さと優しさと ―

藤 豊彦

32

◇夏のアンソロジー 〈ひかりとかけ〉

光広祥子

34

◇シルクロード・カフェ ―― 【責任編集】 木村文子 42

■遊覧寄港〈歌ありて〉 田中昌子 48

■歌壇月旦 宮澤賢治の短歌 49

もとむらしげと

送風塔 藤森巳行 44

報告・現代短歌フェスティバル in 奈良 坂上直美・藤岡美幸 46

■四月号作品批評 66

A……………柴田登志恵・山野幸司

光広祥子・梅本武義

B……………沖田誠子・島根美智子

C……………小野雅子

オリーブ集……………近藤芳仙

今月の二人・作品評 久我田鶴子 18

最近の歌誌より 〔編集部〕 61

地中海規約 (一部抜粋) ・原稿の書き方 85

クリップ……………86 神田通信……………表3

デフォルト

玉井 綾子

帰宅時の電車から見る荒川の波動に明日の多事を予見す

年は予定把握が肝要と一回り大きな手帳を買う

五年後に定年の吾は後進に引き継ぐ為にシステム覚ゆ

帰宅後も会社で受けし問い合わせ電話の解を考えている

回答はひとつではなし帰宅時も入浴中も解探す脳

帰宅して明後日確認することをメモに書きだす休み前の日

休日も仕事のことが離れないふと気を抜くと考えている

残業は許されなくとも休日に脳が仕事にアクセスしてる

一九六九年生まれ。
羊グループ所属。
歌集に「発聲」がある。

レム睡眠になった途端に明日すべきことが次々と展開始む

直前まで会社の人と話してた夢引きずって起きる火曜日

「全く」が「あまり」になっても困らない事にはならぬ「分からない」の前

異動してやっと半年、元氣そうと声をかけられ眉根を寄せる

デフォルトは債務不履行でなく初期値、部下にコンピュータ用語説かれる

三日間残業すれば四日目もするものだと思も周りも思う

三日して今日しなければ物足りぬ 陥りやすき残業依存

根本にバブル気質の残りおり残業すればやった気になる

今日出来なかったメモまま放置して明日の出勤を自分に課する

今日すべき仕事に優先順位つけ家事はやつつけ目につくままに

中学校からの着信が三件もあったと帰りの車内に気付く

真っ直ぐに川面に映る橋梁灯 今宵荒川は既に寝入らん

作品 A

中島 央子

夕茜空

・森

永塚 節子

やぶ椿

・銀

重機音おもく響かせ交りゆく見馴れし町の夕茜空
 夢を追ふ齡はすぎてポケットの隅にしわめるレシート一枚
 良きも悪しきも「ヤバイ」と言ふ日本語やせる世代寂しむ
 灯のかけに跳ねし夜爪を拾ひたりこたはり薄き冷ゆる指先
 旧きより「米屋」と呼ばれる祖先の家土蔵の海鼠壁が目印なりき
 黄水仙風にたゆらに揺られつつ春の気配の充ちくる夕べ
 亡き父の齡を越えて見上げたる令和の白き桜花流れゆく

永田 進一

万博記念公園

・山

仲西 正子

沖繩福州園

・沖

久しぶり空中散歩のモノレール見慣れぬ景色パノラマのごと
 つんつんと土筆顔出す梅根もと春の息吹き光の光のなかに
 楊貴妃とう紅梅香る公園の太陽の塔に光あふるる
 四阿に枝垂れ梅見る源平の紅白梅の青空に映ゆ
 伸びゆる次の蔓は公園の隅だまりのなか洒落たネーミング
 見上ぐれば太陽の塔は半世紀岡本太郎の爆発思う
 鴨泳ぐ日本庭園さざ波の池を巡ればVサインの子

立ち止まり立ち止まりしつつ野の花を探せど春は足踏みのまま
 待ちわぶる春は花粉と共に来し二重マスクを外せぬままに
 あれはいつ杉の花粉とも知らずさざわ揺るるを見上げていたり
 春の彼岸過ぎたるあとの寺院に真紅の椿ひとつ落ちたり
 落ちてなおい色鮮けきやぶ椿ふとも過ぎれる御舟の「散椿」
 暖かき日差し促す大掃除季語は春に納得しおり
 空っぽの時間を欲りて豆もやしのひげ根ひたすらむしり続ける

とおき世のこの界限に口吟の男らあらむよ長閑けしや久米
 雄大な景なぞらえる福州園の滝の滑らか福州の石
 福州園に瀑布の音を聞きてうれし李白の像の掲ぐ盃
 一つの世も隠しき風の流れあれ友好結べる那覇と福州
 歳月は巡りめぐれよ那覇の地に根付きて香れフクシウミカン
 この島に鯨波よするな福州園に習近平の降り立つ写真
 隣国の有事に備うと風吹けど福州園の柳さやくな

中村博子

王朝世界

・漣

ばばりようこ

もどき

・鹿

平安の王朝世界の匂いたつ「源氏物語」五十四帖の色」草木染に透明な色五十四のそれぞれの解説英語とともに王朝の透けし色目を思いつつ小説「粟平」に惹きこまれゆくひさかたの光に重ぬる天皇の孫葉平の運命しのお

日本語と英語に書かるる「はらの祈り」「源氏物語」五十四帖の色」ガザ地区は三万超ゆる死者をだし聖地エルサレムにキリスト喚かんブーチンのイスラエル攻めもさりながらバイデンの砲弾 平和は何時や

西堤啓子

季節前線

・天

浜谷久子

めはりずし

・地

551の店にランチの閑取の化粧まわしにさくら花咲くCTの影 層雲に遮られ暗れ間つかのま二人で歩む 真実を映せぬ鏡持つ人のゆがめるかたち刻々の雲

ZOOMの教室を出て会いに行く 息のぬくもり蒲公英のはないつのまに今年の土筆終わっていた 風の堤にきつとやわらか季節前線北上早く飛び交うはうれしき初ツバメ一瞬の軌跡スマホ・ベン・小さき手帳なんとなく薄紫をそろえて董

白子れい

疏水

・落

檜垣美保子

春

・昴

暇かれないし疏水に水の流れ初む弥生なかばの暗れたる朝往きの道箱をのせし道の草薙りはみどりの葉をひからせるひと葉すら持たぬ桜樹の細き枝ちいさき蕾の日々にふくらむ幹に苔のする桜樹の続きおり疏水のほとりの細き道にも音たてず波もたてずに流れおり水嵩もどりに疏水の流れつらきとき悲しき時は疏水まで流れになべてを流さんとして今日もまた流れにむきて行ちており独り暮らしの日々の淋しく

かえりみて 父さまもどき はたまたは 母さまもどきに恵まれましたこと姉さまのもどきは実に何十年来 もしや前世ではほんものだったかもとただいまは 弟もどきも加わりて してやったりと姉ふりを発揮「もどき」とは申せおろそかならず私の人生上のぬくとき指針もどきとは不確かなる言葉されどされど私にとりてはいとおしき言の葉梅もどきの蔓をレイにしておかれた遠き日の記憶 今も尚あざやか「もどき」という妖しき語韻の優しさをふとも眩くときのありけり小松菜も青梗菜も黄の花を咲かせて冬畑の終わりを告げる春を呼ぶ冬野菜たち花をつけ種つけてゆく華やく畑面 蔭の葦よもぎ芹摘み天ぶらにからりと揚げて春を迎える 売れ残る高菜三本苗を買って遅く育つ葉塩漬けにする塩漬けの菜で巻く酢飯めはりずし紫高菜の歯ごたえ早春たくあんを漬け物容器で作るレシビ大根一本ほどよい分量 蕪寿司・柚餅子材料揃えては一度つきりと作る冬間を春の日をほしいままにし川土手のそこに咲くたんぼの花 明るすぎることおそれつつ菜の花の土手右にみて鉄橋を越ゆ右のベダル踏み外し右にかたむけばしろつめくきに靴は埋もれて満開の桜の脇の奥つ城に男が供うるワンカップ二本 春の風邪手強し十日過ぎたるも喉痛きまま桜みており さいごまで喉飴舐めることできず辛抱りぬわたくしである くさめとは言いがたき朝の盛大なくしゃみは春の愁いを却下

福田庸子 風花の街

・今

風花の舞ふ味の街細き路に少し濃いめの鰻井の屋
 右左よく見て母は横断す続く子理窟の市道

線線は満たせる量に輝けり雪に挑みし日日月みがへる

岩肌をきはだたせゆく春の雪に連山安置さすいきよき空

岩肌は雪に輝く切れこみの深くありたり赤蘆山は
 ひそやかに湧く水のもとあまたなる細根ひろげしクレソンの春
 警戒を解きし背見せ餌を喰める鴨の朝私朝

藤田美智子

くちばし

・新

ものを欲るかたちあらはに見せくるる枝に止まれる長きくちばし
 電線より見下ろしてゐる嘴太の二本の脚にかける力は

目のあへば笑みを返してくる君の傷の深さを測りかねぬつ

語りゐるやうで語らざることあらむ俯きながら髪を揺らして

言ひたきをこらへたるまま帰り来て伊右衛門「濃い味」に喉を潤す
 取るに足らぬことと思へど胃の奥に小さき凝りとなりゐるひとつ
 うはさなど気にせぬほどには強くなしかたち変へゆく雲を仰ぎぬ

藤森巳行

リグレット

・銀

夫婦喧嘩のあとの昼寝のわが顔に白きタオルが掛けてありたり

「ソクラテスにはなれない」と妻は言ふ生まれて以来復せたことなし

「心より 懐 暖めて欲しいの」と長年連れ添ふ妻のお言葉

夕食のおかずは鰻の煮付けなり「タラへ帰らう」オヤジギャグ出る
 その昔君と過ごした滝野川音無川の瀬音変はらず

君住んだアパートすでに無くなりて思ひ出さへも薄れてゆきぬ
 君連れて逃げる勇気がなかつたな我が青春のリグレット嗚呼

本元由美子

姑の法要

・岡

ふはふはの雲海越えて銀翼はわれを連れゆくファンタジーへと
 飛行機は濃霧の空を旋回し東に連れ去る帰省の家族を

法要の案内を浄め客人を迎ふる庭に堅香子の花

法要に故人を偲ぶ語り合ひなく読経のあはひに密かな泪

法事にと機日をかけて斉へたる吾がいらつきを誰も理解せず
 旬日の易刺激性のいらいらが養妹にむかひ不機嫌とふ罪
 鈍色の凍てつく波間に冬がもの一羽がわれに鋭き眼を向くる

牧雄彦

ほんの少しの

・大

あの時のあのひと言を忘れ得ず五十年経ていま冬の風
 速足で風に向かひて歩みゆくほんの少しの春に触れつつ

コロナ禍の四年施設を訪ひ得ずて君は逝きぬとけふ伝へ聞く
 春寒く霧雨続く屋下がり君が計報にこころ乱れつ

若き日の思ひ出脳をめぐりて芝桜の赤まなぶたに揺る

イタリアの町を描きし大作の色しづかなり忘れ難しも
 手を振りて別れし日いまは遙かにて君が白髪を輝きゐるたり

松浦禎子

蔓草

・羊

大空に伸びゆく検査を仰ぎつつマスクをはずす祈りの前に

波のかたみに砂整えし昼の庭写経道場に人の声なく

山上より放生池に落ち続く水送りたし職のかの地

本堂への二股道に置かれたる木箱は発す「ウクライナへの愛」
 ひそかなる祈りを捧ぐ山上にみの笠、作務衣の人影動く

石垣に蔓草延ぶる目の前を吉凶いずれ黒き蝶すく
 「いっばいおかげさま」の軸を掛け沙門慈雲のありし日偲ぶ

松本多摩子

父の歳

・桜

父の歳越えたる息子の頭頂部夫は夭折その後は知らず
ベルギーで生れし優希が中学生ひと月半の暮らしのありぬ
どんどんと演習の音轟きて美しき富士子らの住む街
うぐいすの初音聞きたり子を訪ねま白き富士を望む公園
修善寺に竹のさやさや聞きながら河津桜は葉ざくらばかり
夢持てぬ齡となるもただひとつひ孫の顔を見たしと思ふ
春の花咲きつく庭に黄蝶舞う箱注意報あり桜はまだか

三浦好博

春の五K

・鏡

わたくしに如何しろといふ死と飢餓のガザの日々をばテレビは映し
海見ゆる丘に雲雀が鳴いてゐる一切衆生悉有仏性
幾年をとち込められしこの辞書の「飢餓」の頁に小蛇のミイラ
ああまたも眼鏡の上から目薬を垂らせりかくも老い深まりぬ
寒暖差乾燥強風花粉また黄砂がありて春の五K
ああ無知を恥ぢもしないでうたを詠むAIのやうにはなりたくないよ
手術にて既に取りしを罫に幸の字があり吾は幸せか

三木まり

箱

・晶

豆の花咲く陽だまりに幼な子が蹲みこんで何と語らう
風のない春の朝の薄明かりゆきやなぎの花はこぼれる
耐え切れずふと涙があふれ出る白木蓮の花散る朝
早朝の部屋という箱は薄暗く春雷遠く夢呼び覚ます
夢うつつ遠く遠くに春雷のかすかな轟きうつつに覚める
寝たきりの母が一昨年蒔いた種芽吹く四月の百花繚亂
絶え間なく散りゆく花のスローモーション深くしずかな折りの時を

宮本靖彦

安土城跡

・峻

直登の上り峻なる大手道杖を頼りに踏みしめ登る
大小の石で綴りし急勾配踏みのほる足の置き場に迷ふ
登り口には前田邸船り口には秀吉邸目計りそれぞれ約二百坪
天守閣跡より見下ろす琵琶の湖春寒々とみぞれに煙る
信長の雅の姿がいまも見ゆ霧に霞める湖を望めば
本丸は合議の跡か丸石の敷きつめられて席次とも見ゆ
晴れし日は湖西に望む武奈岳に沈む夕陽を賞でしもあらむ

三好聖三

T

・伊

野良猫の矜持を残す猫達か抱こうとすればひたすら拒む
音域の広き歌にも平常の面をなして美空ひばりは
三年に一度くらの間隔で電話をよこすおののつよしは
人嫌いが高じて野菜と会話かよにわかに笑う電話に彼は
あんば柿食べつつ地図を辿りおり（伊達市）霊山町上小国まで
映像にやたらにケチをつけるゆえ排除されたり夜々を妻子に
煙草一本吸い終わるまでの花見かな小糠の雨の山桜花

御代田澄江

春の兆せば

・茨

細きほそき上弦の月の杯に注ぐ光暁の明星きらめき輝く
女冬の空明るみて海に陸に春来れば吾も人も華やぐ
樹木猝抽選倍率五倍とか遂に來ぬ墓に入るを嫌ふ世
人の移住は叶はざるべし月面を酸素にて覆ふ術無かりせば
憲法の9条無視し武器売るといつこの国の主長ならむや
お茶飲んでテレビ見ると詠ふ歌友吾もさうなり御同様にて
スマホ覚えられず神經衰弱になると歌友吾もぞ友よろしく哀愁

茂木 斌

シノケンの計

・崎

弟の彼岸参りに香ともにシノケンの計報を仏前に知らす
 弟も一途に車好きだつたニッサンサニーか三菱ランサー
 二階に常備のデスクトップもいまは不便にノートパソコン新しく買ふ
 ノートパソコン指がマウスの代りなり慣れるまでには少しとまどふ
 奈良にして三銘椿の糊こぼし五色椿に散り椿あり
 読書また作歌に老いの楽しみをおぼえてさびしくもなしと新村出氏
 玉前神社上総一の宮にありしとかわが家にちかく前玉神社あり

もとむらしげと

反問

・そ

兵器をばつくり輸出する国となりぬ吉田茂は大磯にて死す
 戦争のできる国へと歩を進むヒロシマ出身の総理のもとに
 「国のために捨てられますか」反問す「命は二つあるのですか」
 いのちこそ全き固有店の傷あるリング廉く売らるる
 原爆を落とされしことを怨まぬと被爆者言えり「戦争が悪」
 決断の余儀なき時が近づきて「負ける勇氣」を法皇が言う
 わりやりに徴兵されてゆく人ら乗車を拒み暴れる若者

桃原 佳子

桜

・沖

今は亡き歌手の歌える「荒城の月」を聴きおり姿勢を正し
 一週はめぐるに早しひと月は忽ちにしてリハビリ火・木
 入れ替わり立ち替わりして寒暖の日々はようやく三月となる
 紋白蝶ひらひら一羽まつわりたり朝の菜園菜花いろどる
 誰に会うこともなければと昼を過ぎ散歩に出でし春のくれない
 一年の早さ思ふなかなぞらに咲きし桜をうれしくながむ
 満開の季を嵐に見舞われて無残に散らす桜の乱舞

山下 雅子

惚ぶ

・習

ひもすがら時の流れを統べられて食事リハビリ九時消燈す
 換気中の外気にふるはるは久しぶりきさらぎの大気ひやり冷たし
 閏年の二月尽日迎えたり自宅離れて早もひと月
 今日よりはやよい三月娘よりとどく花柄マスクにせめての春を
 好天の春彼岸迎う所沢の墓地に椎名先生のお姿あり
 自らを「うたはか」と言われし師のみ声ありありとその竹まい惚ぶ
 みなぎれる梢先すぐとつき上ぐるとの曇る空へ桜大樹は

山野 幸司

言語の海

・沖

わが手より離かるる雑誌もらい手に抱かれながら聞く音する
 人類の夢乗せ進む宇宙船冬の夜空に歌うオリオン
 真夜中に届く新聞ポストより引き出す朝の始まりとする
 朝立ちのせぬ年となり振りかえるばかりの時に激しき嵐
 辞書を持ち言語の海を渡る時時折聞こゆ船頭の歌
 メダケ立つ畑に振り上ぐ唐くわの先に高々鳥舞い上がる
 あー言ったこう言った何故会社人激しき声に身の縮む夜

山本 孟

三月

・大

無水地獄の能登に三月蛇口より水ほとばしる極楽の笑み
 大地震港の海底陸となり能登の漁師は海を棄てたり
 渋えたる輪島の港の映像に餌を求めくる海鳥の舞ふ
 「命ある限り仕事を」と輪島塗職人の言に負けてはをれず
 催花雨の朝のカーテン開きつつ短歌の花咲くをうながされけり
 ぶらり入るジュンク堂書店目につきし掘り出しものを二冊手にせり
 春彼岸ローカル線は影連れて継ぎ目継ぎ目に童謡うたふ

花に埋るる柩に歌集添えにしと白きお骨となりしか歌も
越冬の白天井の椿象のぼろと落ち来ぬ春二番の夜

目を開けて医師らの声の聞こえしや里の海より目張来しとは

桜大樹の芽のふくらめば雪洞の手はず整うホテルの露路庭

君の名を呼ばないでよい日の来しやそんなにつよい私ではあるまい

緒のゆるき下駄にて飛び出すその先に片手を上げて「やあ」のあいさつ

電話のベル消えてしまいいし夢の虚カサブランカが開かむとして

横田敏子

空っば

・福

梅本武義

春が来る

・羊

春の空こんなに淡きブルーなり 心に翼つけて翔けたし

玄関に続く細道水仙の一面に咲き「いらっしやいませ」

花咲けば車椅子の夫想い出す帽子に花びらのせて巡りき

久びさに通れば広き整地ありて四代前の市長宅消ゆ

左手のギブス外れる日を待てる右手そろそろ限界近し

舌の上に生チョコレートまろばせる溶けゆくまでに返信ありや

「空っばになってしまった」と頭さし空っばを認知している九十三歳

磯田ひさ子

一足飛びに

・森

大浪美雪

梅の里

・森

こんなふう生きていますと枯れ草の間を埋めていぬふぐり咲く
雪積もる地表の光を吸ひあぐる白木蓮の花五つ六つ

一週間みかんを置けば必ずやめじろ来るとふ騙されてみよう

さみどりの木々を映せる露天湯に吸ひ込まれること身を沈めたり

空元氣といへいつの日か本当の元氣がもどることを信じて

唐様で書く三代目にならぬやう社長就任の息子を見つむ

身の内に潜みて重し夫逝きし五月一足飛びに越えたり

城跡と古墳の街に出で来たり定年近き息子二人と

小さき城濠に映れる浅き春息子二人が傍らに立つ

其の上の戦に兵が走りしか竹林の中の小道に惑う

足遅き我に歩幅を合わせつつ子と向かう先古墳群なり

一人にて来しは最後の場所なると古墳群より夫よ出て来よ

一人来て夫見たるもの我も見る同じ景色を異なる時に

春休みの古墳公園のどかなり子供の声が空に飛び散る

春浅き菜園耕す充実も何か寂しく八十路過ぎゆく

春浅き雨の夜菜園掘り返す労苦に見合う餌のありや猪

猪の捕獲寸前鼠が切れ逃げる動画を今日また見つむ

逃げたれど足に絡まる鼠のありわが怨念が茂みの苦痛

声聞けば姿を見たし近付けば遠退く窩里には朝日

花の季がはや巡り来る昨年よりも病名の増え通院増えて

駐車券どこへやったか一瞬のもの忘れに今日も慌てる

暮山はさねさし相模の梅の里旅人にならひ梅の宴を

クレヨンに描きてみたき梅の里真青なる空に紅梅白梅

雫の色緑なる梅枝広げそのみ淡きみどりにけむる

暮山は岩多き山のぞみ見る柱状節理の屏風なす岩

今少し眠りたき山の稜線を越えて小さきジェット機あらはる

下りゆく坂の向かうに相模灘三角形の青き海あり

吾が裡の塊なるやゴツゴツと湯口に凝る湯の花しろし

奥田陽子

芽吹く

・羊

さりげなき草花育ててありし母その花にわれも親しむ
諦めいし球根の鉢に芽吹きたり三月十日母の生れし日
睦まじきと言えぬ年月重ね来し母とわれなり花を手向けん
臥してありし母のみ浮かぶさびしさに読経の声の時おり混じる
わが母へ思い融けそめたるは何時不在の人の帰りに似て
母のおもいようやく知る齡来てつつしみ思ふ享けたる幸を
八十路より衰えそめし母にして孫を待ちつつ穏しくありぬ

小野雅子

朝空

・羊

カーテンを開けば見ゆる朝空は時が描きゆくキャンパスとなる
大空に時が成しゆくグラデーションうす紅、黄色、透明な青に
をさな子の歩みに合はせ立ち止まりまた歩き出す若き父親
名画なる桜の切手いちまいのはがきに乗せるお札のきもち
短歌のかけら書き留めておくミニノートこれが生きる力かもしれぬ
カレンダールのしるしのままに動きゆく日々なり今日はゆとりのひと日
カレンダーに記したる日の近づきて過ぎ去つてゆく毎月、毎年

神田鈴子

春彼岸

・大

木目込みの小さき雛に満たされてひとりの部屋の内か明るむ
友よりの宇野千代の額は「桜守」今は形見となりて華やく
「桜守」の絵の前に飾る木目込みの雛ふよかな面ざしやさし
小雨降る春の彼岸の墓参り高校生となる孫も混じりて
われの背をはるかに越えてボーイッシュな孫はいつしか無口となりぬ
ブラシ持ち墓石を洗ふ子や孫の肩に小さき雨降り止まず
美しくなりたる墓に春の花雨に濡れつつかがよふま昼

上林節江

十まり三

・海

地に満ちる鎮魂の祈り母への鐘十まり三をかぞえて止みぬ
声を呑み人らのすむ献花台あの日を顕たせ花冷えまさる
海底に^{なぞ}いまだ還らぬ千余体澄ましたような青さが憎い
艶あらば愛されようかネズミモチ冬の底いに黒き実しずむ
六花かと眼こらせば壺形に馬酔木の花のひらき初めいる
起きたよと声張るように雪柳みどりとしろが枝につらなる
軍閥の植えたと碑ある梅園に鳩が子育てで平和にあれよ

菊地栄子

松阪

・海

樹皮あらきふたもとの幹そそり立つ松の大樹を見上げていたり
信長の娘を娶りし蒲生氏郷松阪開府の時代を偲ぶ
物干して人住むらしき青垣の囲める長屋御城番屋敷
本居宣長その名を知れど人知らず六十年過ごしし宅跡見放く
講釈す「源氏物語」詠じたる「山桜花」宣長親し
武士・学者・商人らうごめく城下町埴輪の出土は何の兆しか
おおらかに石垣つづく城跡の樹木の道は一会にありし

草刈十郎

大寒

・世

ウクライナよりの嘆きか虎落雷戦火の終結心より待つ
御慶さへ憚らるる世となりてお屠蘇気分も吹き飛びにけり
息白き淋しき夕べ能登思ふあしたは雪と聞けばなほさら
被災地に次つぎ無情の雪降り自然の温情あれかしと願ふ
生きてゐる証としての確かなる寒さ身にしむ大寒の朝
飛ぶといふよりも吹かれて冬の蝶冷たき風に抗ひながら
清貧のわが家の庭のをちこちに千両のあり万両のあり

河野 繁子

七階の窓

・雁

うるうどし四年に一度の結婚記念日二十九日は入院の日
 体内に点滴と入る人の血に違和感もなく混じるA型
 二百ミリリットル二本を輸血それもまた消ゆる貧血 病院移る
 海の上猿もきつねも骸骨の雲も過ぎ行く七階の窓
 あげやらぬ薄闇のなかゆっくりと光を積みて漁船の通る
 向かいには鳥多くあり夜となり人住むらしく灯りをとます
 さざ波をキラキラ光らせ陽の昇る方向東七階の窓

小林 能子

TYO演奏会

2024

・羊

福島を信じて避難せぬと告げこし家族 十三年前
 福島に暮らす中学生TYO一期生に応募の便り頼もし
 歩いては立ち止まりつつサントリーホールへの道二分咲き核
 坂本龍一監督追悼演奏会のポスターに並びて奇得きユースらの想ひ
 「戦場のメリークリスマス」復活するいのちを想ひ涙あふれ来ぬ
 オリジナル曲開幕式曲「地中海」にカタルーニャ人の愛しき折りも
 「ETUDE」に手拍子を打ちユースらのそれぞれの音に心励ます

近藤 栄昭

予報官

・虹

声低く子供の時代終ったと君十八歳まだ危ういよ
 水銀の小粒丸まり身を守るがんばれダンゴ虫腹を見せるな
 月に手を伸ばしてしまひ引つ込める距離感を研げ時代は君だ
 宵闇に尺八の音渡りくる君との境決められずいる
 侵攻を事故・災害を回避せよ予報出せぬか予報官殿
 百円の苗を育てる草取りが割りに合うかと尋ねて良いか
 未来予測当たらないと知りいるか免責対象後期高齢者

近藤 芳仙

遠き道程

・信

幾十年の記憶をたどりゆく旅よ四万温泉へとほき道程
 生れし子ら孫らとつづく一族の吾が八十歳をこほぐと寄る
 父母も夫もこの世に在らざれば年月の果に生かされてゐる
 埼玉の鯉を食みし午後にして後部座席にしばし微睡む
 四万温泉たむらの記憶 風呂七つ川にせり出す露天ことさら
 ふるびたる旅館の廊をなつかしむ山にそひつつ奥の奥まで
 四万湖には赤き橋ありかすか舞ふ粉雪のこちらにスマホをかざす

坂上 直美

現代名歌選

・天

雛の色紙婚の祝いにもらいしを今年もかざる一人となるも
 本棚に君の遺しし「名歌選」埋もれていたり手に取りてみる
 ようやくに半ばを過ぎぬ「名歌選」初に聞く人あまりに多し
 知らざりし歌人にあれど歌やさし大井広氏「潮音」のひと
 歌心なき父なれどその生を我に教えき明石海人
 百の歌二百の歌を作りても君は還らず寂しかりけり
 人の世に生きの哀しみある限り歌は減びず海あせるとも

坂出 裕子

桃

・洛

もうすぐに春が来るよとささやきて花びら散れり梅の香りの
 白梅の花びら散れる庭の面にほのかに春の香りただよふ
 幼な子のやうに花びら拾ひ来て梅の香りに春を楽しむ
 春はもうそこまで来てる楽しみをいつばい持つてゆくと告げつつ
 生きてゆく楽しみは何 しづかなるくれなる色の空を見上ぐる
 長旅の終りを告げて山茶花のはなびら散れりくれなる淡く
 閉ざされしころ開きてゆくやうに桃の蕾のはつかふくらむ

佐藤道子 老い 甲

昔の事は今もさやかに想へるも今した事は今直ぐ忘る
耳なりと家のきしみのその度に亡夫が見守りくると思ふ
若き日の诗情はあらず見たままを記録するだけ淋しき齡
思ふこと思ふがままを載せくるる歌誌有難し高齡者には
外国人の犬と触れ合ふ朝の道犬は人種を問はず馴染める
その昔鳥同士の大戦争ありて嘴細町に住み着く
この夏の暑さに嘴細山に去り嘴太鳥の声牙え渡る

篠原まり子 歳月 羊

難遊び桃の節句の桃の字は春の兆しと命の兆し
出産の近づく孫の幼な顔時折にして「私がママよ」
乾きたる土に芽を出す確実に季を知りたる水仙の球根
あの歌はロシア語では歌われない旧満州を知る加藤登紀子は
コーヒーもお茶も遠ざげ選択は深き眠りと爽やかな朝
「とおい穴」直太の歌よ父はははは語ることなく幼き日は
鳥辺野に死屍累るいのシーンあり汚れたカラスのあさりしは何

柴田登志恵 難あそび 天

ころろよき京言葉もてひひなさま罪科もはら引き受け百歳
いくたびの地震のがれこしひひなさま流動的な調和の形
ひひなさま代代のおさなを自護りきぬめ官女囃子方みな去りゆきしが
去り際に五人囃子の奏でけるジャズのローズはほの明らけし
このところ遊び間違ひひひなさま出奔計画謀り放題
川尻の海に鈴鴨の大き群れ雨の間遊び今日にも立たむ
争ひあふ地へ行きたしとひひひなさま幼き者に寄り添はむため

須川千恵香 理香の追憶 眉

理香急逝 まだ知らされぬ病室に「お母さんありがたう」の声聞こゆ
喪服手に筆筒開けば理香の服少女の頃の愛用に触る
追憶の崩れゆく間失つて改めて知る親子の絆
輝きし二男の挙式の和装の美黒留袖の理香を追ひある
理香の技そば米汁の秘訣あり正月互礼に今年も堪能
透折後理香家に廻り昼御飯掲げるその度吾の卓上へ
三男に嫁ぎし理香の墓処探しせめて来世も近くにゐたき

鈴木結志 白寿 福

一首詠ふでに手習い生き姿天満書きに一途をそそぐ
夢の世や白寿つつがなくなつた詠みて詩上の花に心をむすぶ
幸せを呼ぶ福寿草陽をくみて黄金界の诗情いろどる
生き姿ゆめの夢なる白寿得て鈴木家の長き血筋の冠を得る
相応しい時ひとしおに身におほゆ書芸にむすぶ一心一芸
天心のひかりの反射部屋に入りシクラメンの花に活力そそぐ
A I の情報の誤訳を防ぐため改善中とう将来たのもし

関根榮子 モチグサ 埼

古の若菜摘む歌思いつつ雪はあらねどモチグサを探る
雛の日に作りし草餅のモチグサと蓬は同じと知りし幼日
すでにして花芽の密な小松菜の上莖のみをばきばきと折る
高齡の夫が畑をやめしより小さき庭が畑化しゆく
いつの間に春菊が芽を出しており大事な匂いすみれの場所に
落椿の風情はあらず小鳥来て蜜吸いながら花びら散らす
失せ物の二つ三つに翻弄され三月散散に過ぎてゆきたり

関根 和美

ささいな事

・埼

ひとバック千円もする「あまりん」を何で買おうぞ「どちおとめ」手に英国のトライフルなるデザートも日本につくれば大ごととなるみずからの糞糞に流すA-Iのあいさつの声似れども非なり血の通う言の葉のもつぬくもりのあると言えざりA-Iのこえ月々に海こえてゆく歌会と書かれしひとの豊饒をよむ

さきがけて小さき桜花の灯ることゆすらうめの花ひらきそめたり石づみのアーチ橋かかる川の辺をさくら菜の花つづくよはるか

高尾 恭子

完璧な日々

・大

ポップコーンを片手に観ている糞尿の臭いとどかぬ「パーフェクトデイズ」役所広司だから絵になる糞尿にまみれこの世の便器をみながく神様と棲んでいるのか落書きの相合い傘に「彼女とオレ」は聖俗のあざなえる夜に踏みいだす相合い傘の名を消せぬオレ吐瀉物を洗いながして人生はこれでいいのだ夜の十三

ミスタッチくりかえしつづ間にあわず税の申告 砂を囁む貝

「完璧な日々」ならぬ日は味噌汁の浅瀬の砂を囁んでほじまる

高津 砂千子

木蓮

・風

菜種梅雨の恵みを受けて捨て置きし鉢の芍薬すくすく伸ぶるわが使うガラケーを指し友は言うそれが一番いいのよねえと

「ご飯炊くははじめチヨロチヨロなかパッパ」小鍋朝より働くも良し気がつけば紫園のみどり群をなし春はまだかと待ちかねている

簡単とうことばあふるる今の世に取り残されしわれかも知れぬ病み重き姉が望みの紫木蓮切るはなかなかむつかしきかな

むらさきの色に惹かれてゆくらしき木蓮を手に末期の姉は

滝田 靖子

ふう

・新

楓和とふ名前を紙に書いてみる毛筆は難しいと思ひつづ

ふうふうと呼べばいささか不機嫌な声に答へる「ふうは一回」男の子に生まれたかつたと言ふふうは一人称を僕に決めたらしい

メリーさんの羊弾きながらアンパンマンマーチ歌つてゐるふう五歳走り回つて歌つて食べて昼寝して笑つて怒つて五歳は忙しい

ねえふうと遊びたいと聞いてくるけれどそれは命令なんだよねふう五歳児つてあんなのかひそひそと厨にふうの話してゐる

田土 成彦

樹下

・宙

モノレールの床の日差しは移りつづかけろひつづゆく春暖の日を

紅梅のいささか残るその向かう太陽の塔は碧空に建つ

須臾に過ぐとは言はないが太陽の塔見しは五十余年前なり

梅まつり今日で終はりのときを来て樹下の土筆の四、五本を見る

樹下に立つむかし乙女の君がゐてはらう花を手のひらに受く

園庭に作業する人のヘルメット木の間隠れに位置移りゆく

人工の滝と言へど健気にもせせらぐ音は春の先駆け

田土 才恵

西田さん

・宙

春来れば会いに行きますと言ひしこと果たせぬままにいに終わりぬ

春暖の差の激しさの続く朝きみまかりしと知らせの届く

着信の記録残して逝きましし悔い漂える朝のさみしさ

聞こえ来る電話の声のまぼろしに桜咲く日は今まだ遠し

背の君と丘の墓処に眠らんとある日は楽しみのごとく話せり

木目込みの人形われに賜りて残る思いのひとつ二つ三つ

もういいよそんな声聞き逝きたるや背の君の待つ遠き方へと

玉井綾子

雷鳴と雪

・羊

雷の落ちる雪夜をリビングにガザ紛争の報道を見る
 降る雪に夜空の底の照らされてガザ・ウクライナの悲鳴の聞こゆ
 雷鳴と雪に違和感 市街地の甘きアンコンシヤスパイアスの
 大雪の次の日トタン屋根を打つ雪庇の平の音に目覚める
 朝五時の雪が七時に雨になり子供を起す始とはならず
 掃き溜めに見る傘袋お揃いの傘と一緒になければ無価値
 中学の西門に咲く黄水仙ムスカリの背は保護者顔する

久我田鶴子

春の夜の

・羊

枯れたりと見てみし鉢に冬過ぎて山しやくやくの芽のやはらかき
 いくたびもあつたかいねと母はいふ娘の手とはあるいは思はず
 見舞へるをねぎらふ母のありがたうお忙しいところとは他人の行儀
 混濁の速度はやむる入院をうべなふこみからちからがぬける
 生も死も不確かになる日の暮れを会ひたきひとか滝沢の姉
 厚ぼつたい顔になつたよ七十が間近にせまるわたしの顔だよ
 春の夜のパニクリパニクラあゝも、火を噴くあたまをなだめて寝かす

●地中海叢書近刊●

・藤井満江遺歌集「風の坂道」(第954篇)

・石田明彦歌集「ロードノイズ」(第955篇)

|| シリーズ「第一歌集を読む」ご案内 ||

◆第二期・対象歌集と執筆者

- ・田土才恵歌集「かざぐるま」 泉 嘉穂子
- ・牧 雄彦歌集「誰もみぬ部屋」 ふじとよひこ
- ・辻 彌生歌集「霧しうずまく」 色井静代
- ・中島央子歌集「桃李」 伊東ミイ子
- ・近藤良子歌集「花霞」(近藤芳仙) 石塚貴美恵
- ・橋本曠子歌集「いくとせを」 小原香里
- ・山下雅子歌集「陽光」 六戸千佳子
- ・田村利子歌集「霧の緞帳」 横田敏子
- ・小野雅子歌集「花筐」 岩井久美子
- ・中村博子歌集「流れ逝くもの」 三浦好博
- ・鈴木文子歌集「西窓の彼方」 滝田靖子
- ・船田清子歌集「藍の時」 辻田聡美
- ◆第三期・対象歌集と執筆者
 - ・鈴木結志歌集「不易流行」 福光敬子
 - ・坂出裕子歌集「日高川水游」 坂上直美
 - ・篠原まり子歌集「ひとりの春」 三浦美代子
 - ・今村叶子歌集「カデンツァ」 安部 律
 - ・三浦好博歌集「水の辺のうた」
 - ・小宮山玉江歌集「冬の林檎」
 - ・大原真理歌集「シャガールの旋律」(三木まり)

※創刊50周年記念号(平成11年)に掲載分までの地中海叢書
 を対象としています。昭和19年以前生まれの作者を優先さ
 せてきましたが、大原真理歌集からは昭和20年以後生まれ
 になります。